

# 大窯成立期の 工房の様相について

## —桑下東窯跡の事例から—

● 武部真木

桑下東窯跡において確認された大窯第1段階を中心に操業した工房跡は、これまでの山茶碗・古瀬戸窯にはなかった規模をもち、多様な施設が配置された類例のないものであった。ただし、調査事例に乏しいことが大窯期の工房の実態について比較や評価を困難なものにしている。そこで隣接する桑下城跡・上品野西金地遺跡の調査成果、および大窯導入の主要な目的である「量産化」を手掛かりに、桑下東窯跡の工房・製品・立地について再評価を試み、大窯成立期を代表する工房の様相として提示できるとの見通しを得た。

### はじめに

平成17年度の瀬戸市桑下東窯跡の調査において、大窯成立期の工房跡の事例として重要な成果がもたらされた。『桑下城跡』報告書作製段階の平成24年に開催されたミニ・シンポジウム「桑下東窯跡と桑下城跡—戦国期における大窯生産のすがた—」\*においては、瀬戸・美濃窯ともに窖窯から大窯期の工房の調査事例の比較から検討を行ったが、やはり特異性が際立つままその位置づけは明確にされたとはいえない状況にある。

そのような中で、瀬戸市文化振興財団による平成27年度企画展『戦国時代の瀬戸窯—古瀬戸から大窯へ—』が開催され、古瀬戸から大窯への移行期に関するこれまでの研究史および問題点が整理された。そこでは大窯期の生産技術と工人集団に生じた「変革」について、窯体構造・窯跡分布・焼成器種と窯詰め方法・生産者（工人とその組織）という4つの視点から論じられ、桑下東窯跡の工房については、施設の機能分化から推定される職人の分業、すなわち大窯期工人集団の変質を示唆するものであり、立地の特

\* それぞれ専門の立場から、城館と大窯の関連性および大窯工房の実態について明らかにすることを目的とした。（公益）瀬戸市文化振興財団・考古学フォーラム共催

徴等により城館（桑下城）の経営と関連性がみられる事例として改めて評価がなされた。

小文もこれまでの生産窯を中心とした研究成果をふまえて、「量産化」を目的とした大窯成立期の工房の景観として、「工房施設」「製品の規格」「遺跡の立地」の3点から再評価の試みを提示しておきたい。

### 1. 桑下東窯跡の工房の景観

#### （1）立地と周辺遺跡

桑下城跡・桑下東窯跡・上品野西金地遺跡は水野川が西流する品野盆地の北東部丘陵上に西から順に並んで立地する（図1）。標高211mに主郭の築かれた桑下城に対して、詰めの城といわれる品野城が盆地の反対側となる標高約330mの丘陵上に位置し、桑下東窯跡のほかにも本丸南側には桑下窯跡（古瀬戸後IV期新段階）、城跡北西側の麓に西窯2号窯跡（古瀬戸後IV期新段階）および西窯1号窯（大窯第2段階）などの施釉陶器窯が分布する。

3遺跡の調査は平成17年～22年にかけて行われ、総面積は計18,626㎡、範囲は東西方向で約300mに及び、15世紀後半～16世紀半ばを中心とした在地領主の城館跡、大窯期工房跡、それらに隣接する墓域を含む集落の一端が明らかとなった。

まず城館について。近世の史料（主に地誌類）によれば、科野（品野）の城として桑下城（館）と品野城の区別は明確でなく両者を示している（宇佐見 2009）。在地領主に名がみえる永井（長江）民部については、定光寺『祠堂帳』に「科野長江氏修理進」（永正 15）とあり、16 世紀初めに地域の有力者であったこと、『因幡志』（寛政 7 年成立）にひく「今川義元感状写」の記事により、（三河）松平氏の家臣として（尾張）織田氏と争った永禄年間頃の緊張関係が伝えられている。

桑下城跡の調査範囲全体では、窯道具類と古瀬戸前期後半～大窯第 4 段階までの陶器の分布がみられる。このうち明確な居住が認められた地点は 9 曲輪（09 区）および主郭部分の 2 ヶ所であり、他にこの間の丘陵上部に床面が 6～9 m 程度規模をもつ堅穴状遺構 3 基が検出された程度であり、遺構・遺物は偏在している。9 曲輪は南向き斜面の一角に造成された 25×10m 規模の平坦面に、焼土を含む整地層の上・下面で建物跡や石組の排水溝が確認されており、大窯第 1・2 段階を中心に継続して営まれている。また主郭平坦面の出土遺物では古瀬戸後 IV 期から大窯第 2 段階が中心となり、大窯第 1 段階

の出土点数が突出する。

桑下城跡の構造について、報告書整理中の段階であったが、中井は主郭をめぐる大型の堀（07 区の西堀・北西堀・北堀・北東堀・東堀）と全体を外観して、「極めて特異な立地」と評した。通常ならば尾根を切断する南北方向の堀切を設けるべきところを東西に構築していること、主郭周囲の堀の規模が一定していないこと、ここを堀底通路として使用した可能性がみられること、通常ならば堀切を背後にして前面に階段状にみられるはずの曲輪配置がなく複雑となること等を指摘した（中井 2012）。検討の結果、城館西側とは整合しない突出した形状と規模をもつ主郭の空間は、城の防御機能を高めるために大規模な造成により構築されたことが明らかとなった。報文では最終的な完成の時期は 16 世紀半ば頃と推定されているが、西堀付近の主郭造成以前の遺構より 16 世紀初頭とみられる土師器皿（ロクロ調整）が出土しており、少なくともこの部分の主郭平坦面の成立はやや遡る可能性も考えられる。

上品野西金地遺跡の調査地点は、標高 200～215m の低地部から斜面が含まれる。水野川右岸の低地部分に古代・中世・近世の掘立柱建物

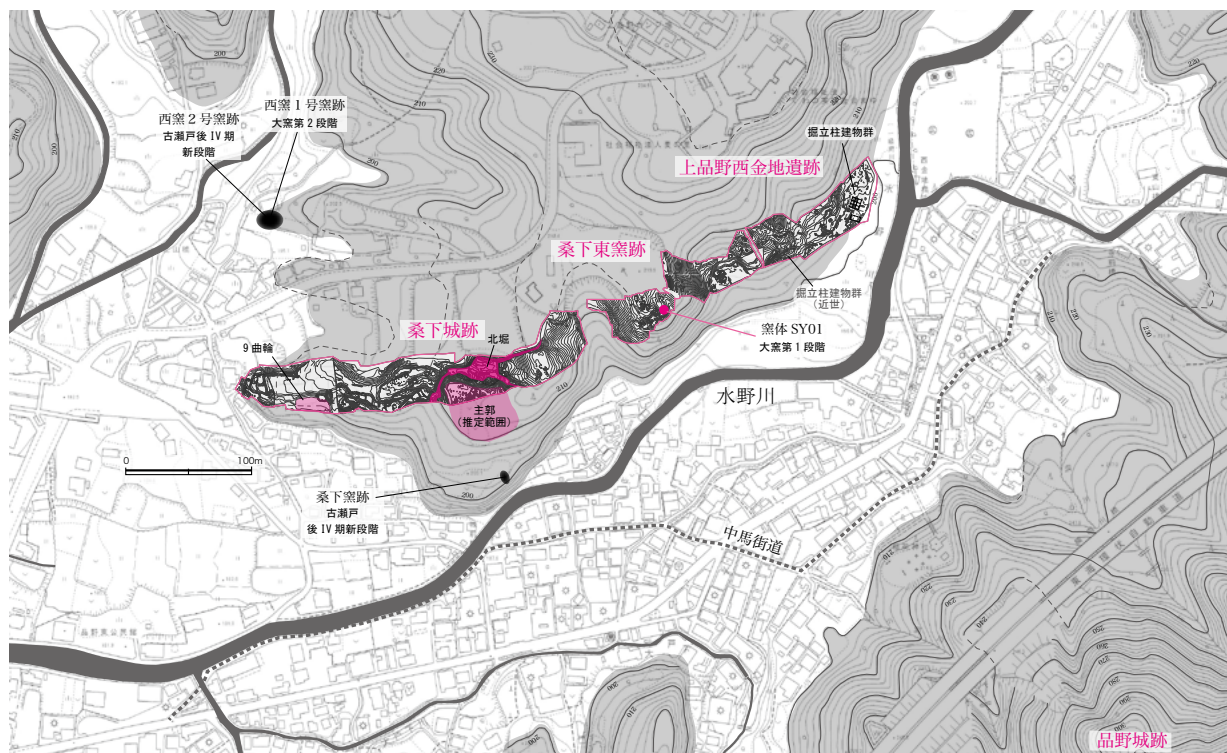


図1 桑下城跡・桑下東窯跡・上品野西金地遺跡の位置関係 (1:6,000 小澤ほか 2013 をもとに作製)



群が、桑下東窯跡から連続する丘陵南向き斜面には数カ所の平坦面が造成され、土坑墓（28基が4ヶ所程度のまとまりの範囲内で検出されたほか、大窯前半期の陶器を大量に包含する堆積層と遺物集積（主に4地点）が認められた。

工房との関連では、ロクロピット群の作業場に先行する素掘りの土坑（A区SK34）があり、北宋銭と鉄滓が出土したほか、やや東方の地点（墓群B,C,D）では古瀬戸後IV期から大窯第1段階の遺物を含む土坑9基が確認されている。そして工房付近の墓群Aと墓群Dでは、花崗岩巨礫を含む土坑群から大窯第4段階後半の志野小碗や寛永通宝が出土しており、大窯期前半期から近世にかけて利用されている。

次に遺物集積と工房資料との内容を比較すると、大窯第1段階を中心とする点は共通するものの、主要な製品である碗・皿類が少なく、大

型製品（壺・甕・釜類）の割合が高くなるなど器種組成が異なる。さらに釜類の多数で使用痕（被熱、炭化物付着）が認められる。これらは一括性に乏しく、斜面上方から崩落・堆積したものであるが、窯壁等は含まれず灰原の構成とも異なる。報文では単位面積当りの集積率として器種の偏在が提示され、これを器種別の管理状況の違いとみている。すなわち、広範囲に散漫に分布する器種は遺跡内で使用・消費されるものであり、一方集積率の高い器種は広域流通品と看做されるものが多いというもので、調査範囲外、丘陵の上方では製品選別などの作業が行われると同時に、継続的に消費活動を行う場が存在したと推定されている（早野 2013）。付近で他に大窯は確認されていないため、桑下東窯（SY01）と東端の遺物集積まで最も遠い所で約180mの距離があり、大型品を扱う一連の作業

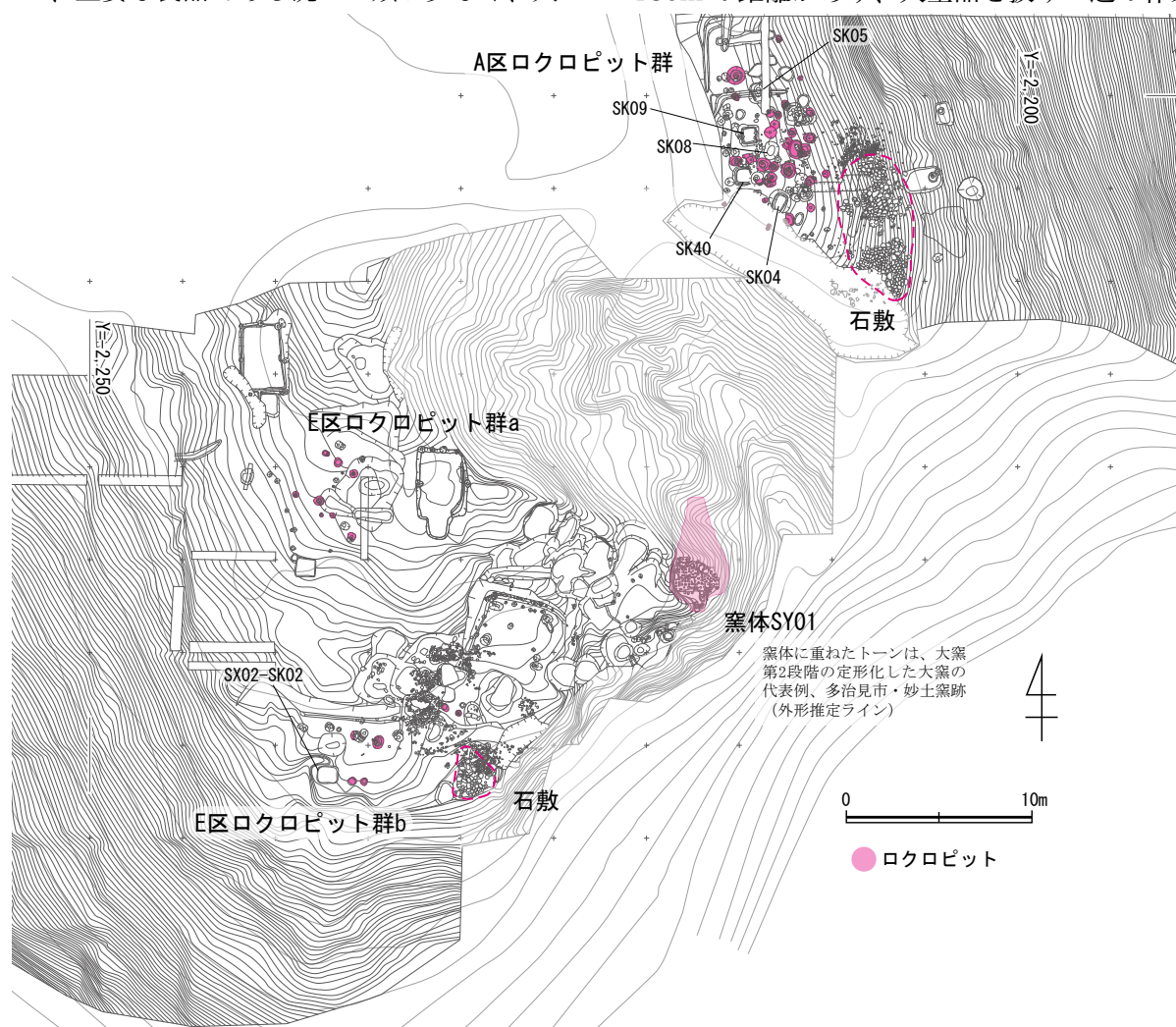
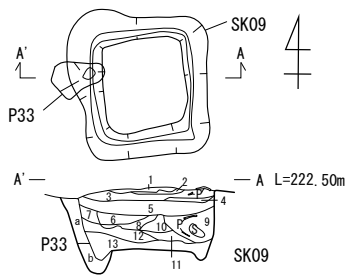
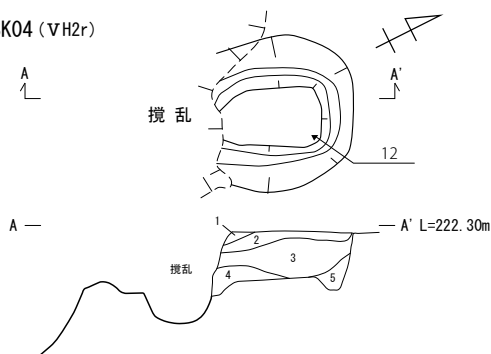


図2 桑下東窯跡の作業空間（小澤 2011 をもとに作製）

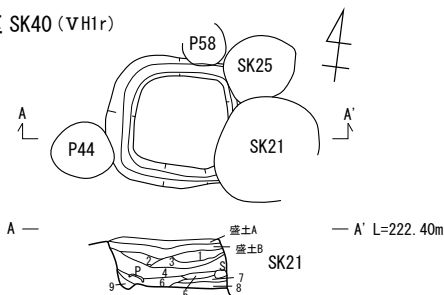
A区 SK09, P33 (VH1r)



A区 SK04 (VH2r)



A区 SK40 (VH1r)



E区 SX02-SK02 (VH8m)

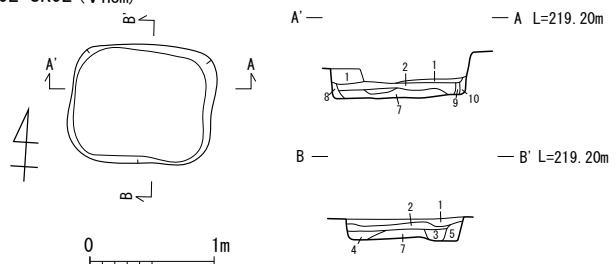


図3 「粘土溜」と推定される土坑 (1:60, 小澤 2011 より)

空間とするにはやや疑問が残る。因みに、広い工房範囲が明らかとなったものでは大窯第3段階後半から第4段階末に作業を行った土岐市北部の高根山古窯跡群の事例がある。高根山の尾根付近に一の沢窯跡、西窯跡、窯沢窯跡の3基の大窯があり、これらに囲まれた尾根上の南北200m、東西100mに及ぶ範囲に工房が展開し、窯体と工房施設出土遺物との対応関係から少なくとも約100mの範囲の関連性は確認されている(加藤2012)。

## (2) 工房の特異性

桑下東窯跡の工房の規模は少なくとも南北43m×東西37m、およそ1,425㎡の範囲に及び、標高218～222mの丘陵頂部付近の平坦面を造成して利用している。工房を構成する遺構および確認数は、窯体(大窯,1基)・ロクロピット(計55基)・粘土溜(小型の方形土坑,6基)・作業場(方形平坦面,3基)と掘立柱建物(1棟)・竪穴建物(長方形竪穴,2基)・石敷遺構(2ヶ所)と粘土採掘坑多数が確認されており、ここでは轆轤による製作から製品選別までの一連の作業が行われていた(図2)。ロクロピットは規模・構造が異なる2タイプに分類され、多様な施設群とその配置から、組織的な分業体制、工人の階層差の存在などが推定されている。

桑下東窯跡の特異性を際立たせているのは、

これまでに類例のないロクロピットの検出数であり、近接した場所に繰返し設置されるなど、工房全体では4段階もの遺構の変遷過程が推定されている。改めて注目したいのは、近接して存在する他2種の遺構(施設)である。まず、ロクロピットの集中範囲3地点のうち、A区とE区b群では、長軸約1.2m、深さ30～70cm程度の「粘土溜」とされる特徴的な形状の土坑が設置されている(図3)。平面形は上位は円形から隅丸方形を呈し、下方にいくにしたがい長方形となり断面形状が角張った箱形を呈する。底面の周囲を細い溝がぐる場合があり、これについては板囲いの痕跡と推定されている。土坑底に粘土(堆積または塊)が認められる。A区で5基(SK04,SK05,SK08,SK09,SK40)、E区で1基(SX02-SK02)が確認されており、規模に若干の違いはみられるが、ほぼ同様の形態である。粘土の保管場所としての機能が推定される遺構は、山茶碗と古瀬戸窯窯の周辺施設として、1～3基のロクロピットのある作業エリアで検出される事例(河合2012)があるが、配置および粘土の堆積により判断される凹みや不定形な範囲である場合がほとんどであり\*、桑

\* ただし、山茶碗焼成窯である塩草B窯跡で1.3×0.9mの平面形隅丸方形の土坑(SK03)の検出例がある。位置は1号窯分炎孔付近から向かって左手側少し離れた地点。



下東窯跡のような一定の規格、形状を有する施設としては認識されない。もう一つの施設は、斜面の縁に比較的近い工房の端部に配置されたロクロピット群に接するように設けられた石敷遺構である。これは斜面端部に盛土（A区では約2m）を行った上に花崗岩円礫を敷き詰めたもので、E区SK07は崩落のために残存範囲が小規模であったが、A区SX01を構成するものは南北8m、東西3.7mの規模をもち、実際にはさらに南側へ広がっていたと推測される。石敷遺構の表面は石の扁平な面を使用することにより凹凸が緩和されており、表面および石の間には精練された粘土の残存が認められたという。ただし石敷全体は水平ではなく谷側に向かって傾斜している。この点について報文は、石の重量により今日までに自然に沈み傾斜したものであり、機能としては平坦面の拡張に伴う補強と推定されている。勿論推定の域を出ないが、ここでは轆轤工房に近接する丘陵の縁辺部にあることから、水の利用場所や原料粘土に関連する作業場所としての用途を追加しておきたい。

なお工房施設での石材の使用は、大窯では燃焼室前部（焚口から分炎柱下端）までの床面および両側壁に平たい石を貼付ることが基本となっており、15世紀代の一部の窖窯（多治見市東町1号窯）にも既に存在する（『瀬戸市史 陶磁史篇 四』）ように、特別な施工技術ではなかったと思われる。

以上の施設群が近接する状況は、斜面地を利用した工房（作業場）跡では未だ確認されていない。尾根に近い平坦面という立地において成立し得る作業空間と捉えることも可能であろう。さらに加えるならば、3基を超える複数の轆轤が稼働する作業場には、既に定形化した構成であったかもしれない。

## 2. 製品の規格について

天目茶碗と全面施釉の皿の量産を目的として、匣鉢を用いた窯詰方法は、大窯期の間に次々と変化している。古瀬戸中期の鉄釉天目茶碗の製作に伴い始まったと考えられる匣鉢の使用により、器種によっては規格（径と器高の最大限度）が限定され、そのサイズが一定期間継承さ

れる状況となる。本格的な量産化が目的となった段階において、製品に対してはどの程度の精度が求められていたのであろうか。当時の製品に対する規格について検討を試みた。

分析の方法は、時期の指標となる器種として天目茶碗を選択し、口径・器高・高台径の計測値<sup>\*</sup>をもとに比較を行った。このうちの「高台径」に関しては、天目茶碗の報文分類を参考にしつつ計測値の分布をまとめた。3項目の計測値が有効なものを使用し、それぞれの平均値と高台径については数値のばらつき（散布度）を測るものとして範囲と標準偏差を求めた（表1、図4）。分析に用いた試料（天目茶碗）のは以下の通りである。

### （1）～古瀬戸後Ⅲ期 - 音玄窯跡・鶯窯跡

音玄窯跡（1号窯二次窯）出土遺物の個体数（接合後底部残存1/2以上を1個体としてカウント）では、施釉陶器総量3,537個体のうち99.8%が古瀬戸後期の資料であり、このうち後期の天目茶碗は115個体、碗類の中では平碗の857個体の86%に次ぐ9.14%である。輪高台のⅠ類（Ⅰa・Ⅰb類）と内反り高台のⅡ類（Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc・Ⅱd類）に分類されており、計測値の条件に合う試料は、Ⅰ類が2点、Ⅱ類が33点である。なお古瀬戸後期の窯道具類は遺物総量の21.43%を占めている。

鶯窯跡は古瀬戸中Ⅳ期から後Ⅲ期に亘るおよそ70年という操業期間が想定されており、天目茶碗は出土器種のうちの3.75%を占めている。削り出し輪高台のⅠ類と内反り高台のⅡ類に大別され、Ⅰ類とⅡ類はさらにそれぞれA～H類に分類される。底部片での個体数ではⅠ類が1019個体、Ⅱ類は1139個体に及び、このうち高台周辺に錆釉化粧掛けのあるものが22%含まれる。灰釉天目茶碗もⅠ類はA～F類、Ⅱ類はA～N類に分類される。計測値の条件に合う試料は、灰釉Ⅰ類が17点、灰釉Ⅱ類が27点、鉄釉Ⅰ類が87点、鉄釉Ⅱ類が62点である。鉄釉天目茶碗についてはさらに時期別に分析を試みた。

### （2）古瀬戸後Ⅳ期古段階 - 下石西山窯跡

土岐市に所在する古瀬戸系施釉陶器窯、下石

<sup>\*</sup> 計測値の数値は報告書掲載データを使用した。

表1 天目茶碗の高台径比較（古瀬戸中Ⅳ期から大窯第1段階）

遺跡名	時期	器種	高台形状	資料数 n=	口縁径平均 (cm)	器高平均 (cm)	高台径 (cm)			
							平均	最小～最大	範囲	標準偏差
音玄窯跡	後Ⅲ期	天目茶碗 (Ⅱ類)	内反り高台	33	12.518	6.709	4.297	2.8～4.2	1.4	0.2855
鶯窯跡		灰釉天目茶碗 (Ⅰ類)	輪高台	17	11.647	6.418	4.137	3.8～4.5	0.7	0.2476
		灰釉天目茶碗 (Ⅱ類)	内反り高台	27	12.211	6.852	3.659	2.7～4.6	1.9	0.3645
	中Ⅳ期～後Ⅲ期	天目茶碗 (Ⅰ類全体)	輪高台	87	11.669	6.371	4.118	3.5～4.7	1.2	0.2759
	中Ⅳ期	天目茶碗 (Ⅰ類)	輪高台	6	11.883	6.417	4.133	3.9～4.4	0.5	0.1751
	後Ⅰ期	天目茶碗 (Ⅰ類)	輪高台	23	11.644	6.404	4.009	3.7～4.4	0.7	0.2448
	後Ⅰ・Ⅱ期	天目茶碗 (Ⅰ類)	輪高台	7	11.500	6.243	4.029	3.6～4.4	0.8	0.2984
	後Ⅱ期	天目茶碗 (Ⅰ類)	輪高台	31	11.765	6.394	4.203	3.6～4.6	1.0	0.2822
	後Ⅲ期	天目茶碗 (Ⅰ類)	輪高台	10	11.720	6.550	4.050	3.6～4.6	1.0	0.2635
	中Ⅳ期～後Ⅲ期	天目茶碗 (Ⅱ類全体)	内反り高台	62	12.055	6.744	3.545	2.9～4.5	1.6	0.2868
	後Ⅲ期	天目茶碗 (Ⅱ類)	内反り高台	24	12.196	6.842	3.604	3.1～4.5	1.4	0.2896
	後Ⅲ期	天目茶碗 (Ⅱ類)	内反り高台	31	12.039	6.723	3.536	3.1～4.0	0.9	0.2026
下石西山窯跡	後Ⅳ期古段階	天目茶碗 (Ⅰ類)	内反り高台	63	12.625	6.865	4.497	3.7～5.5	1.8	0.3192
桑下東窯跡	後Ⅳ新～大窯Ⅰ	天目茶碗	輪高台	29	12.070	6.822	4.372	4.0～4.8	0.8	0.2153
上品野西金地遺跡	後Ⅳ新～大窯Ⅰ	天目茶碗 (A1,2,3,5,6類)	輪高台	47	11.800	6.800	4.600	4.2～5.2	1.0	0.2000
小金山窯跡	大窯Ⅰ	天目茶碗 (A・B・C類)	輪高台	16	11.325	6.388	4.306	3.8～4.9	1.1	0.2839
小名田窯下窯跡	大窯Ⅰ	天目茶碗 (Ⅰ-A・Ⅰ-B類)	輪高台	22	11.305	5.977	4.495	3.8～5.0	1.2	0.2919

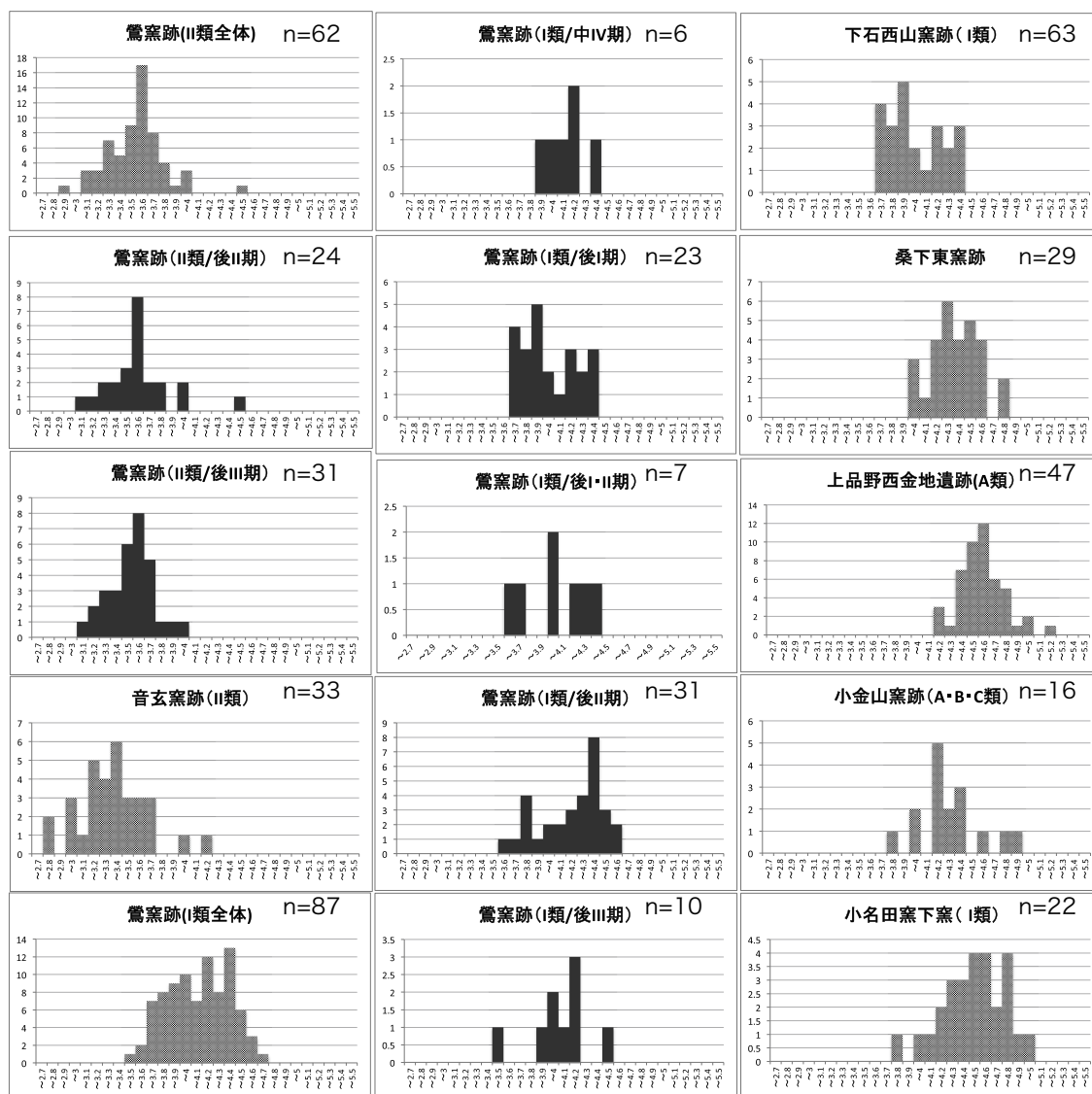


図4 天目茶碗高台径の分布（古瀬戸中Ⅳ期から大窯第1段階）



西山窯跡では、鉄釉天目茶碗は内反り高台のⅠ類（A～F類）、削り出し輪高台のⅡ類、糸切りのままの平底のⅢ類に分類されている。試料はⅠ類64点を用いた。（Ⅱ類2点、Ⅲ類2点のため省略）

### （3）大窯第1段階 - 桑下東窯跡・上品野西金地遺跡・小金山窯跡・小名田窯下窯

桑下東窯跡は灰原等が丘陵の一部とともに既に崩落しているため製品は少ない。天目茶碗は破片数で1,903点、器種としては擂鉢、端反皿に次いで多く、総点数の7.7%を占める。掲載資料で時期が比定されているものは、古瀬戸後Ⅳ期新段階5点、～大窯第1段階4点、大窯第1段階63点、大窯第1・2段階3点、大窯第2段階10点、大窯第2・3段階1点、大窯第3段階5点がある。このうち計測値の条件に合う試料は輪高台の29点である。

上品野西金地遺跡出土遺物のうち、古瀬戸後Ⅳ期新段階から大窯第1段階の天目茶碗は接合前破片数で1,539点、個体数（底部残存1/2以上を1個体としてカウント）は125点となり、碗類の中では81.7%、遺物総個体数での割合は15.2%を占める。大窯第1段階までの資料は、削り出し輪高台のA1・A2・A3・A5・A6類があり、計測値の条件に合う試料は47点である。

小金山窯跡の出土遺物は、窯体部及び灰原部調査地点から出土した陶片242点および窯道具があり、このうち天目茶碗は44点で出土陶片の18%を占める。報文では天目茶碗は削り出し輪高台のA・B・C類に分類されている。ただし本稿ではA・B・C類を一括して取り扱うことにした。計測値の条件に合う試料は16点である。

多治見市小名田窯下窯跡の大窯期（第1～3段階）出土遺物は、5号・6号・8号窯に帰属するものと考えられる。鉄釉天目茶碗はこのうち最も量産された器種であり、口径11.5cm内外のものをⅠ類、7.5cm内外のものをⅡ類に分類されている。輪高台のⅠ-A類とⅠ-B類が大窯第1段階に比定されおり、計測値の条件に合う試料は22点である。（このほか大窯期灰釉天目茶碗として6点が掲載されているが、計測値の条件を満たさないため省略）

以上に抽出した試料は主に廃棄品であり、一

部または全体が製品の基準を満たさないと判断されたものである。そのため計測部位のうち口径・器高よりも変形が少なくかつ遺存度が高い、「高台径」を選択して検討を行った。匣鉢規格からは直接制限を受けない、製作者の意図と技術に左右される部位であり、製品規格の精度を測るのに有効ではないかと考えたためである。

結果、高台径のばらつきの範囲は内反り高台に比較して輪高台の方が小さくなる傾向がみられた。これは前者の計測位置が不安定な接地部とされているためであり、この点については製作時に意識し易い部位を仮定した上で再計測が必要かと考える。ただし鶯窯跡の後Ⅲ期資料は平均値への集中度が高く、後述する大窯資料とはほぼ同等の数値が認められる。

続いて輪高台のグループについてみると、鶯窯跡の中Ⅳ期資料と桑下東窯跡、上品野西金地遺跡出土資料では平均値への集中度が高い傾向が窺われる。ただ今回提示した数値のみで規格の有無に言及することはできない。そもそも試料群は口縁部周辺の形状や器高等を指標として複数に分類が可能であり、時期差や器形の作り分け、場合により工人技術の違い等の条件が混在する不安定なものである。そうした前提の上でも高台径のばらつきが微小となる上品野西金地遺跡や、桑下東窯跡のような複数工人が轆轤を引き製作する工房に限定して考えるならば、大窯期の「量産化」にあたり、（意図的にあるいは結果として）生じた製品基準の存在は完全に否定されるものではないと考えている。

## 3. 窯跡の分布と推移

図5は瀬戸市・多治見市・土岐市・豊田市藤岡地区の陶土層（瀬戸陶土層・土岐口陶土層）の範囲\*に古瀬戸後Ⅲ期から大窯第1段階の窯跡分布を示したものである。なお瀬戸・美濃・

\* 陶土層の分布範囲は以下の文献・地質図を参照した。  
藤岡地区 山田直利・片田正人・坂本 亨,1977,20 万分の1 地質図幅「豊橋」(第2版)  
(国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター 地質図 Navi)  
瀬戸地区 瀬戸市,1986,『瀬戸市史 資料編二』  
美濃地区 (資料a) 須藤定久・内藤一樹,2000.9,「東濃の陶磁器産業と原料資源」地質ニュース 553号,33-41頁/(資料b) Web版岐阜県地質図『ジオランドぎふ』<http://www.geo-gifu.org/geoland/>

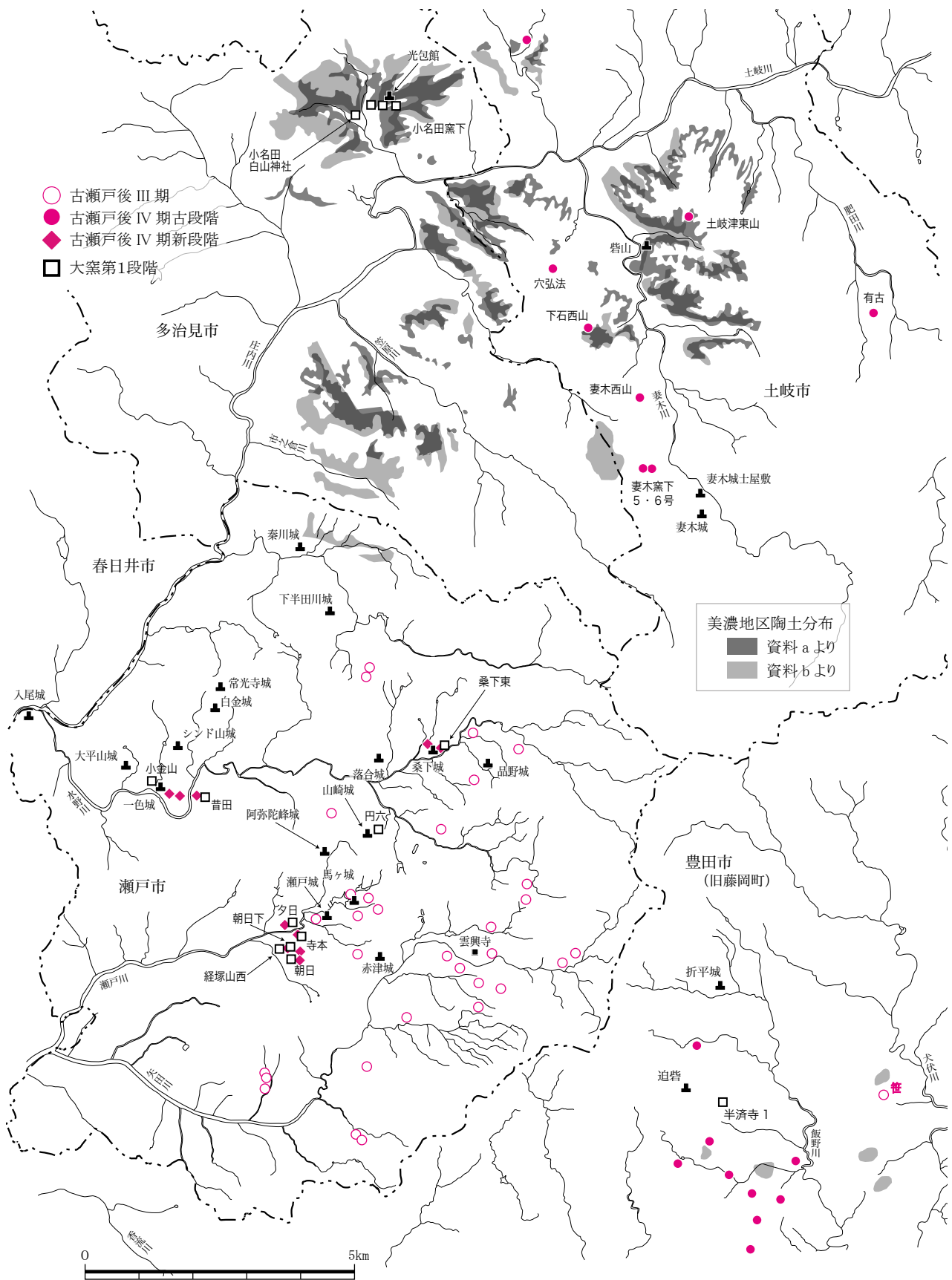


図5 陶土層の範囲と窯跡・城館跡の分布



藤岡の各地区ごとに複数の地質図資料から合成していることに注意されたい。

古瀬戸後 III 期の窯跡分布は、藤岡地区の笹窯 1 基を除き瀬戸市域に限定される。前段階の古瀬戸後 I 期・II 期からの推移としてみると、瀬戸川と矢田川上流域（瀬戸区東部と赤津区）に集中していたものが、後 III 期にはさらに丘陵部の奥地へ拡散する傾向がみられ、水野川上流部や中期以来途絶えていた品野地区においても操業が始まる。いずれも陶土層分布域からは離れた場所に築かれている。

古瀬戸後 IV 期古段階（15 世紀中葉）は「古瀬戸系施釉陶器窯」が成立する大きな面期であり、瀬戸地域では施釉陶器も山茶碗生産も行われず「窯業生産の空白期」と認識される。土岐市域の土岐川以北に 1 基、土岐川以南では計 7 基があり、北流する妻木川左岸の丘陵上に一定の距離を置くかのように分布し、多くが標高 200～500m の尾根付近の斜面に築かれている。概ね陶土に比較的近接した位置に分布する。藤岡地区では一挙に 9 基に増加するが、かつて笹窯跡が築かれた伏伏川流域方面にはみられず飯野川付近でも陶土層に近い支流の一つに分布が集中する。

古瀬戸後 IV 期新段階には土岐市域や藤岡地区で操業は継続せず、瀬戸地区に再び回帰するような分布の変化がみられる。従来から指摘されているように、窯跡の立地も山間部から沖積地（集落）に近い丘陵上へと大きく転換することに加え、その後近接して大窯が操業を開始するという経過が共通して認められる。瀬戸地区の水野川中流域の水野地区、上流域の桑下東窯跡が成立する品野地区、瀬戸川中流域の瀬戸地区の 3 地点があり、いずれも陶土層の分布域から若干離れる。そして瀬戸地区では唯一、円六窯跡のみ大窯から操業が始まる地点であるが、こちらは陶土層の範囲に近接する場所である。

美濃地区の大窯は、陶土層の分布域に重なる多治見市・小名田窯下窯跡付近で 4 基が相次いで成立した。藤岡地区では半済寺 1 号窯跡があり、陶土層分布域との関連性は明瞭ではないが、飯野川流域の古瀬戸系施釉陶器窯の分布範囲内に位置する。

後 IV 期古段階の変化（古瀬戸系施釉陶器窯

の成立）には瀬戸窯からの陶工の集団移動が想定されており、在地領主による経済振興策の一環としてみるもの、さらに領域支配者と室町幕府との関係を重視するもの、流通機構を押えた問屋商人の介在、窯業生産者の逃散的行動を想定するものなど、政治的・社会的な背景から選地された可能性について様々な見解が示されている\*。単に「陶土や薪を求めて工人が徐々に移動してきたものでないことは明らか」（藤澤 2004）であり、少なくとも日常器種の生産が増え量産が始まっている瀬戸地区の後 III 期には、丘陵部山中への「陶土」の供給体制はすでに整備されていたとみられ\*\*、しかも異なる供給体制の美濃地区との間を領域を超えて移動する状況には、為政者側の意向が全く無関係とは考えられないのである。

## まとめ

古瀬戸窯の工房内施設の一つである「乾燥場遺構」は、操業停止後の窖窯を用いた古瀬戸中期段階の「窯体改造施設」から、専用の施設として「方形炭溜遺構」が設けられる後期段階への発展過程が推定された（藤澤 2006）。量産のための技術開発と効率的な作業環境の整備は古瀬戸中期段階に萌芽がみられ、後期段階のうちに加速したことを予想させる。そして古瀬戸から大窯期への移行期には、窯の立地と陶器生産の基本的な技術・技法など、連続して継承されるものがある一方で、窯体構造と生産器種、生産工房の様相については転換ともいえるべき変化が一挙に生じている。

桑下東窯の工房施設の規模、および各設備の数量と配置は、「量産化」を目的に集約化された作業環境と捉えることができる。工房施設それぞれの具体的な意味（機能）についての説明は充分でないものの、実は個別には既に試行さ

\*（藤澤 2004）にこれまでの諸見解がまとめられている。

\*\*「…赤津区の窯跡は、製作に適した粘土を産しない白亜紀の花崗岩層に立地するのに対し、後 III 期以降に成立してくる他地域では、周辺集落など一部の窯跡を除けば、いずれも製作に適した粘土を産する新第三紀、鮮新世に属する地層に構築されている。すなわち、単位群が形成され生産が一定期間保証されていたと思われる地域には陶土がなく、単位群が形成されず単独窯の多い地域には陶土が認められるのである。」（藤澤良祐 1991）

れていた技術や構造であった可能性は少なくない。とすれば、工房内施設の配置等から推定された階層差を含む組織的な分業体制は、それまでとは異なる生産体制が突如として現出したようにも見えるが、この点にも検討の余地があると考え。成立期の大窯工房とは、「量産化」のために短期間に手際良く整えられた、均質性の高い技術体系であるところに最大の特徴があるように思われる。

成立期の大窯の分布域は近距離に城館跡の存在が推定されるような中核的な集落が存在し、大窯の導入には地域支配を強めつつあった在地領主の関与<sup>\*</sup>が想定されている。実際に城館（推定地）からの距離でみると、大窯第1段階の窯はほぼすべてが1km未満の範囲に分布し、第2段階以降に成立する大窯はより（城館から）離れた場所に築かれる傾向がみられる（小

澤2013）。桑下城跡では窯業生産への直接的な関与の証拠は得られていないが、軍事的な防御施設という城本来の機能を最優先とした時、この両者の位置関係と城館の構造の意図を利点から明確に説明することは容易ではない。そうした面からも桑下城主の関与は古く遡り、桑下東窯の築窯当初の選地の段階から城館との共存が図られていた可能性は高いと考えられるのである。

謝辞 今回の小文に取り組むにあたり、次の方々・諸機関のご協力・ご配慮等を賜りました。御礼申し上げます。（敬称略）

青木 修 岡本直久 小澤一弘 蔭山誠一  
加藤真司 金子健一 河合君近 佐野 元  
中井 均 鈴木正貴 藤澤良祐 松澤和人  
服部 郁 公益財団法人瀬戸市文化振興財団

<sup>\*</sup> 第二編 第四章 第一節「三、中世城館と瀬戸大窯」（『瀬戸市史陶磁史篇 四』）

## 引用・参考文献

- 小澤一弘 2012 「桑下東窯跡と桑下城跡—大窯と城館—」『考古学フォーラム 21』 考古学フォーラム  
河合君近 2012 「瀬戸窯における工房跡の事例と検討」『考古学フォーラム 21』 考古学フォーラム  
加藤真司 2012 「美濃大窯における工房について 付篇 美濃の城館と窯跡」『考古学フォーラム 21』 考古学フォーラム  
藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要 V』 瀬戸市歴史民俗資料館  
藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群 II—古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要 X』 瀬戸市歴史民俗資料館  
藤澤良祐 1992 「大窯期工人集団の史的考察—瀬戸・美濃系大窯を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第46集』  
藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯（財）瀬戸市埋蔵文化財センター  
藤澤良祐 2004 「付編2 「古瀬戸系施釉陶器窯」の成立過程」（近藤ほか2004に所収）  
藤澤良祐 2007a 「総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』  
藤澤良祐 2006 「中世瀬戸窯の乾燥場遺構」『古岡康暢先生古希記念論集 陶磁史の社会史』桂書房  
中井 均 2012 「中世城館と生産遺跡」『考古学フォーラム 21』 考古学フォーラム  
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1996 『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—資料集』  
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2001 『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジアの視点から—』  
「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会資料集  
（公財）瀬戸市文化振興財団 2015 『古瀬戸後期の様相—古瀬戸系施釉陶器窯の成立と展開—』平成26年度企画展図録  
（公財）瀬戸市文化振興財団 2016 『戦国時代の瀬戸窯—古瀬戸から大窯へ—』平成27年度企画展図録  
瀬戸市 1993 『瀬戸市史 陶磁器篇 四』  
小澤一弘 2005 『鶯窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第109集  
小澤一弘 2011 『桑下東窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集  
小澤一弘 2013 『桑下城跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第181集  
金子健一 2002 『塩草B窯跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第25集  
河合君近 2008 「昔田窯跡」『瀬戸窯 瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告』（財）瀬戸市文化振興財団  
近藤真人編 2004 『下石西山窯跡 発掘調査報告書』土岐市教育委員会（財）土岐市埋蔵文化財センター  
早野浩二 2013 『上品野西金地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第173集  
松澤和人 2012 『音玄窯跡』（財）瀬戸市文化振興財団調査報告書第46集  
山内伸浩ほか 1997 『小名田窯下古窯跡群発掘調査報告書—多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第47号—』  
多治見市教育委員会